

『ヴァンパイア・オブ・ソウル』

諫山 裕

獲物を狙う猫科の敏捷さと、空を舞う鷹のような鋭い視線。美貌は数学的正確さでバランスを整え、白い肌は大理石を思わせる。引き締まったボディラインが、生体工学の完成度の高さを物語っていた。

——ヴァンパイア・オブ・ソウル。

彼女につけられた、称賛と羨望の名前である。

男なら、きっかり六〇秒は彼女の姿に釘付けになるはずだ。だが、理性のあるものなら意志の力を振りしほって、一〇秒以内で視線をそらすことを勧める。彼女に見つめ返され、獲物にされないうちに——。

六〇秒。短いようで長すぎる時間。自分の意志を保っていられる限界だ。もし、それ以上彼女を見つめ続けているとしたら、もはや男は自分の意志ではどうにもならない状態に陥っているだろう。

彼女は微笑みをうかべて、男に近づいていく。運ぶ足のリズムで腰が左右に揺れ、豊かな胸が重力で弾む。攻撃的な双丘が上衣のすき間から誘惑し、男の呼吸を止める。

「はい。わたしはソフィア。コネクト・ラブしない？」

彼女の宣戦布告だ。男は茫然自失のまま、黙ってうなづく。

ふたりは丸いテーブル席へと移動した。野次馬がテーブルの周りに集まり始める。騒がしかった店内はシンッと静まりかえり、これから始まる展開に期待と好奇の目が向けられる。

「あなたの名前は？」ソフィアはきいた。

「俺はライトフットだ」彼の声は震えていた。

「名前通りに軽快だといけれど」

「攻めるのは速いぜ」

「楽しめそうね」

彼女は被っていた帽子を取る。ブロンドの髪の中でうごめくものがあった。太

めのパスタほどのものが、スルスルと彼女の頭の上でいくつも頭をもたげる。先端が卵形に膨らみ、青い光を発する突起が最先端にある。蛇のように体をくねらせて、あるものは頭上高く伸び、あるものは彼女の胸元へと這いおりていく。

メデューサの髪——。

神話の生きものが、顕在化した姿だ。

ライトフットは上着を脱いでいた。彼は両手の拳をあわせて、肘を肩の高さまであげて、渾身の力を入れる。筋肉が盛り上がり、上半身にくつきりとした陰影をうかびあがらせた。骨をポキポキとならす音が断続的に響き、彼の額の上が隆起していく。やがて、螺旋が刻まれた二本の角が現れた。

^{デビル}
鬼だ。

「ふうん、わたし同じ、ヘル系か。攻め方変えなきゃいけないかな」

「同類なら、仲良くやろうぜ」彼はいくぶん自信を取り戻していった。

「同類でも、手抜きはしないの。なにを賭ける？」

「もちろん、あなたの体だ」彼は舌なめずりした。

「男って、どうしてそればかりなの？ わたしはあなたの脳味噌よ」

ライトフットはゴクリと生唾を呑みこんだ。彼女がこれまでに餌食にしてきた対戦相手の噂は、彼も知っていたからだ。

コネクト・ラブとは、ふたり以上の相手と脳をリンクさせて、支配権を奪いあうゲームだ。ラブという名前に惑わされてはいけない。語源はメイク・ラブから来ているのだが、絡みあう肉体の代わりに、精神を絡みあわせるのだ。ゲームに負けたものは勝者に支配され、最悪の場合には自我を失ってしまう。

ソフィアの蛇の髪は、思念波を増幅する武器であり特性を表している。ライトフットの角も同様だ。それは生体工学の産物であり、特異な能力を発揮するための器官でもある。

彼女はこれまでの対戦で不敗だった。ゲームの賭として要求する脳味噌とは、相手の記憶や知識をすべて自分のものとして取りこんでしまうことだ。勝ち続けている彼女は、なん人分もの知識を吸収し、人数分だけの経験を得ていた。不敗の背景には、吸収した脳味噌が活用されていることはいうまでもない。

脳味噌を空にされた肉体はというと、魂の抜け殻となり、植物状態に陥ることになる。事実上、死んでいるのと同じだ。

「心残りはない？ 言い残すことがあったら待ってあげるわ」

「ちっ！ おまえこそ覚悟しろよ。その綺麗な体とはお別れだ。ボロボロになるまで可愛がってやるぜ！」

「ふふ。どうかしら？」

ソフィアは攻撃を始めた。

体から発する強烈なオーラが実体化し、彼女の裸身の分身を創りだす。メデューサは彼に襲いかかる。一瞬たじろいだ彼は、思念波を紡ぎだすのに集中力を欠いていた。

彼女は一気にケリをつけず、じわじわと相手を攻めていく。防戦する彼の神経網を、一本、また一本と切断する。だが、彼は痛みを感じることはない。過剰に分泌されるエンドルフィンが、痛みではなく快感を与えるからだ。

ヴァンパイア・オブ・ソウルと呼ばれるゆえんは、彼女の攻め方にあった。決して痛みを与えず、獲物にされることの快感を相手に与えるのだ。伝説のヴァンパイアがそうであったように。

ゲームが始まったと同時に、ソフィアは主導権を握っていた。彼の魂は彼女の思うがままだった。極上のキャビアをすするように、彼女はじっくりと味わう。

彼女はヴァンパイア・オブ・ソウル。魅力的だが、魅入られてはいけない。

もし、あなたが魂を吸われてもいいのでない限り――。

ヴァンパイア・オブ・ソウル

著 者：諫山 裕

e-mail：yutaka@cat-studio.com

URL：<http://www.cat-studio.com/isayama/>

執筆日：2001年8月26日

発行日：2001年8月30日

※著作者の承諾を得ずに、無断転載、あらゆる形態での二次利用することを禁じます。

copyright (c) 2001 Yutaka Isayama